

Q：周りからはシドニー大会の後、コーチとか指導の方にまわってくれという声はあったのですよね。それでも、仕事でもコーチングでもなく、やはり現役で、かつプロフェッショナルにこだわっていきたいというのは、何か強い信念があった訳ですよね？

A：世界を見ていなかったんで。最終的には世界で戦いたかった。実際、日本の車椅子バスケットボールは世界でまだ通用していない。ならば、誰かが世界を見に行かなければといった時、僕がチャンスをもたらしたんで、じゃあ僕が見に行こうとなったんです。

Q：しかし、パラリンピックや世界大会と多くの世界規模の大会は経験されていますよ？

A：対戦しただけですよ。それは世界を見ることにはならないですよ。やっぱり世界を見るといったら、その場所に行って、その環境に身を置いて、その選手たちと一緒にプレーして、それで初めて世界が見えるんじゃないかなと思うんですよ。現時点で僕はオーストラリアしか見てないですけども、日本の中にいるよりかは一歩進めたかなと思っています。

Q：2002年にパース・ウィルキャッツに入団され、最初の印象というのは？

A：純粋に楽しかったですよ。バスケットが純粋に楽しめたというか。

Q：チームとの契約は、何年契約となっているのですか？

A：一応、1年ずつですね。終わった時に「来年も来る？」って言われて、「うーん、来ようかな」といった感じ。チーム側が「要らない」って思っていれば、何も言ってこないでしょうね。

Q：ウィルキャッツに入団されてからずっとレギュラーの座を確保。オーストラリアでのご自身の個人の力に、「敵う」とか「敵わない」とか、レベルのものさしはありますか？

A：来て肌を合わせてみて、もうちょっと行けるだろうと感ずることは、絶対あるはずなんです。日本にいる選手は、海外での経験がないから、どこを攻めていくかとか、どのぐらいまで行けるかっていうところの線引きが大分手前で引かれてしまっているんですよ。もっといけるんですよ。それは、でもやっぱり肌を合わせないとわからない。



経験を生かしたアドバイスはチームにとっても貴重なものとなる。



本誌「過去3回のパラリンピックに出場し、日の丸を背負った時のお気持ちは？」
岩野選手「確かに気持ちのいいことはあったけど、背負うことが目標ではなく、掲げることが目標でしたから。」

Q：ご自身のブログに「ドリブルは前を見て、下を見ないようにしてやる。車椅子で外を歩く時、道路の穴などが気になる。でも転んでも良いじゃないか。前を見ていればいつもと違う何かが見えてくるはず。健常者も同じだよな？」が印象的でした。

A：失敗を気にして、見えないものがあるよりも、失敗を気にせずに、見える方が良いんじゃないかと。たくさんいるんなものが見える方が面白い。たとえそれで失敗しても。失敗は、成功の反対ではないですよ。成功の途中。だから、失敗するのが怖くて、失敗しないようにするのは、成功にも繋がらない。失敗してもいい。途中で失敗してもその先に成功があるのだから。プレー中、ドリブルを失敗するのが怖くて下を見た時、その時に見逃してしまうことがたくさんあるんですよ。ドリブルを失敗してもいいから前を見て、その瞬間を覚えていれば、あとはドリブルを練習すればいいだけの話ですよ。その瞬間を見逃してしまう方が怖いような気がします。自分たちのチームが勝利に近づくための大事な一瞬かもしれない。それを見逃してはいけないと思います。

Q：ご自身のプレースタイルとして、他の選手より優っているものは何だとお考えですか？

A：視野とか判断力という意味での、バスケットに対する頭は良かったのかもしれない。そして、今は歳ですかね（笑）。まあ、経験が全てなんですよ。経験値に勝るものはないでしょうから。

Q：例えば、頭が良くてもプレー中の一瞬の時は考えてはできないですよ？

A：いや、考えていますよ。ずっと考えています。どんな時でも考えています。普通は、どのようなプレーをするか考えて結果を出すけど、僕の場合は結果を考えてプレーを選んでいきます。3つ、4つの結果が予想され、その結果を選んでプレーをする。結果を見て判断をする。将棋とっしょですね。先を考えてプレーをする。そうするためにはコミュニケーションと他の選手の考え方や動きも頭に入れておかなければならないので、そのための時間は必要となりますね。

🏀 日豪比較

Q：例えば、オーストラリア人と日本人を比較した時に日本の選手はテクニックがある、オーストラリアはフィジカルが強い、というのはあるのですか？

A：やはり、体格差と重さっていうのはあるでしょうね。これはしょうがないんですけど、それをカバーできるものが絶対あると思うんです。例えば、日本はスピード。あと、器用さであったりとか。

Q：車椅子バスケットボールの日豪対決では、今のところオーストラリアに軍配が上がりますが、車椅子バスケットボールの選手人口からして、妥当なのでしょう？

A：いや、選手人口は日本の方が多くですよ。障がい者の数自体が全然違いますし。オーストラリアは人口自体が約10分の1で、障がい者の数も恐らく10分の1、チームも10分の1。なので、強さの理由は、文化でしょうね。

Q：オーストラリア人にとってスポーツが身近という部分ですか？

A：スポーツをとりまく環境が違うんじゃないですかね。スポーツをしている比率はこっちの方が圧倒的に高いので、その差じゃないですかね。それだけいい選手が出てくる確率が高いですよ。比率が高ければ、日本は人口が多いので、スポーツ人口は多いかもしれないけど、比率が低い。埋もれている素材がいっぱいあるかもしれませんね。

Q：今の日本のレベルは？

A：いつも上から7番目、8番目ですから、来年の北京パラリンピックにはベスト4ぐらいには入りたいところですね。でも上に行くためには、何か起爆剤が必要になると思うんですが、残念ながら選手もコーチもなかなか見つかっていないのが現状でしょう。

🏀 視野と判断力

Q：岩野さんのポジションはポイントガードですが、そのポジションへの執着は？

A：いや、特に執着はないですね。障害的にできるポジションが決まってくるんで。「中に入ってやってくれ」って言われてもできないですから。ゲームのコントロールかアウトサイドとか、そういうポジションになるんでしょうね。

Q：1日のどのくらい練習をされているのですか？

A：昼間の時間帯の半分、5時間くらいはバスケットですね。毎週月曜日と火曜日の晩には、ローカルコンペティションがあります。試合開始が7、8、9時からなんで、9時からのゲームの時には終わるのが10時過ぎになる。帰ったら11時で、それから飯ですから、夜は寝るしかないですよ。その試合の前は体育館に来て練習して、そのまま試合なんで、だからずっとこの体育館に入り浸りですよ（笑）。ほぼ毎日練習のため、体育館には来てます。そして、チームの練習は週に2日間ですが、シューティングとかの個人の練習は毎日。とにかく練習ばかりです。

🏀 現役へのこだわり

Q：以前、メディアの取材に記憶に残る選手よりも記録に残る選手になりたいと答えています、それは具体的にどういうことでしょうか？

A：プレーをしている以上は、記憶よりも記録に残る選手でなければいけないと思っています。現役のアスリートとして、記憶を考えるのはよくない。記録は自分が望めば残せるかもしれないけど、記憶に残すのは僕が残すものではなく、人のものなのでどうにもならないですよ。アスリートとして「人の記憶に残ろう」と思っただけだと思えます。

Q：記録を望むためには現役を続ける必要がありますよね？

A：コートに立つことへの現役ではなく、1本でも多くシュートを入れたいといった意味での現役にはこだわっていますね。

Q：現役にこだわるということは、プロフェッショナルにこだわるということだと思いますが、プロフェッショナルでのオファーがなくなることも考えてらっしゃるのですか？

A：それは考えていますよ。もし、パースで「要らない」と言われれば、他を探さないといけなくなるでしょうね。また他でも「要らない」となれば、現役を続けている意味がなくなる。まあ、その前に怪我をしてプレーができなくなったり、モチベーションが下がってできなくなってしまうこともあるだろうけど。

Q：今シーズンへのモチベーションは？

A：自分には、「自分が成長したい」というものがあります。例えば「チームを優勝に導きたい」とかいったものではなく、「まだまだ成長して、まだまだ見ていないものをたくさん見てみたい」というものがありますね。だから見るために「現役」でいなければならないんです。

Q：そして、現役でいるためのモチベーションは？

A：ゲームに入っている時と、外にいる時のモチベーションは違います。ゲーム中はチームに貢献しようとする。点を取ることだったり、パスを出すことだったりでしょうけど、コートの外にいる時は「自分が育ちたい」と思う方が強い。シドニー大会の時までは、自分が成長を追い求めているとは考えていなかったです。全日本の中でも、プレーすればある程度できたからということもあったので。でもシドニー大会が終わった後、全日本の選考から落ちて、もし「自分の力が世界で通用しない」といった理由で落とされたのなら、「本当に自分の力が通用しないから落とされたのか」ということを試してみたかったです。そして、パースに来てみたら「まだまだ自分ができる、成長できる」と思った。だから、今も現役を続けているのです。



新しいユニフォームを手渡され、リーグ2連覇に向けて新たなスタートを切る。